

自叙伝

芳賀敏郎

父親について

父 芳賀浩は秋田県の湯沢に、士族 芳賀高成・なかの長男として生まれた。兄弟は 5 人で、弟は敬三、潔、稔、謙の 4 人であり、私は皆さんから可愛がられた。特に潔叔父さんからは後に述べるように大変な世話になった。

父の学校成績は立派だったと聞いている。旧制横手中学を卒業して、東大の入試には失敗したが東京高等商業学校(後の一橋大学)に入学した。

学資が無かったので、奨学金を求め、まだ経理学校のなかった海軍から奨学金を貰って学業を続けた。

当時は、英語の教育が盛んで、ドイツ語の講義は英語で行われたと聞いている。

卒業後海軍に入り、海軍将校と軍艦勤務に従事した。第 1 次世界大戦では、青島の大戦に参加したと聞いている。

大正の終わりの軍縮で退官した。階級は大尉であった。その後、民間企業(日清紡績?)で働くことになった。その後、日本放送協会に移った。

母親について

母、田所やす(母は 安と書いていたが、正しくはひらがなの やす)は、神奈川県高座郡田名村 立城家の田所 * . * の末子として生まれた。

兄弟には、茂一、杉山嘉喜治、野口、*、ふさがいる。

母のすぐ上の姉のふさは田所としぞうと結婚し、分家した。仲が良く、私を伴えば田名小学校の裏の家をしばし訪問した。

田名小学校を卒業後、当時としては珍しく東京の女学校(現 豊島が丘女子高校)に進学した。横浜線の橋本駅には人力車で送り迎えされたと聞いている。

姉の*の嫁ぎ先の野口*の紹介で父と結婚した。

東京・藤沢時代

1927 年 3 月 25 日(昭和 2 年)荏原区(現在の品川区)で生まれた。私が生まれたことで、そこが両親の本籍になった。

幼年期の思い出はほとんどない。

2 年下の弟に信郎(のぶろう)がいたが、どのような遊びをしたか記憶にない。

私は病弱で、いつも病気をしていた。

私が 5 歳? で赤痢になり入院した。同時に信郎も入院したが疫痢(重症になった赤痢)になり死亡した。入院中に弟の死亡を聞いたことを記憶している。

久が原小学校に入学した。

私が病弱のため、気候の良い神奈川県藤沢市に転居し、**小学校に転校した。

名古屋時代

小学校の 2 年生になるとき、父が名古屋放送局に転勤し、家族で転居した。

東区(現在の千草区)の田代小学校に転校した。

2年生のときの担当の辻本先生の思い出はないが、3年生から5年生までの3年間担当された落合先生は大変良い先生であった。勉強が好きになったのは落合先生の影響が大きい。

同級生に、ロボットの研究者として有名な森政之氏がいる。毎年の夏琵琶湖で開かれる「人力飛行機」の進行係としてテレビで会っている。

明子さんと雄彦さんが生まれ、乳母車に乗せて押したことを記憶している。押しながら走り、つまずいて膝を地面にこすりかなり深い傷ができた。傷痕は今でも残っている。

名古屋の4年間に、東山公園、東山動物園が開かれ、覚王山から東山公園まで市電が延長された。市電が自宅のすぐそばを通るので、工事を見に行くのが大きな楽しみであった。

また、自宅の近くにある城山公園は良い遊び場であった。

5年生の終りに、父が東京に転勤することになった。

最後に落合先生に呼ばれた、一対一の対話は絶対に忘れられない。筆箱を見せろと言われた。鉛筆削りを使っているのを見て、言われた。ゴミ箱の中に捨てられている鉛筆を探してきなさい。それを見ると「これは**君の鉛筆だ」と言われた。どうして分るのかと聞くと、「鉛筆の削り方の雑さから分る」との返事。「鉛筆の削り方を見るだけで、生徒の性質が分る。鉛筆はこのように削るものだ」といって、丁寧に削って見せて下さった。それ以来、鉛筆はきれいに削るようになった。仕事をするときに、できるだけ良い仕事をしようとする気持ちを持たせたのもこのような落合先生の指導が大きく影響していると思われる。

東京の小学校に転校するに当たり、父は病弱の私のことを考慮して、5年生をもう一回繰返す(一般用語では落第する)のが良いと考え、落合先生に相談し、5年生の3学期は全部欠席し、出席日数不足により留年という処理をして頂いた。

東京目黒時代

東京市目黒区上目黒に転居し、烏森小学校に転校し、2回目の5年生となった。

5年生は2度目だから勉強しないでも優秀な成績が取れると思ったが、期待外れで、クラスの順位は5番に留まった。私よりも上位の同級生は広瀬、三宅、田川、臼井の4人である。

家族は、両親、父の母(なか)、兄弟4人である。当時としては生活レベルが高く、女中がいた。一時、母の姪の恒子さんが家事見習いで同居した。

終戦前は、家長は権力を持っていた。父は夜帰宅するとき、家の前の10m位で手をたたく。この音が聞こえると家族全員が玄関に出迎えた。

子供も、長男は重く見られた。名古屋時代には意識しなかったが、東京に移ると私は兄弟とは別扱いで祖母の部屋で寝ることになった。また、応接室に机が準備され、一人で勉強する場が与えられた。

その代わり、父の長男に対する期待は大きく、その厳しさは尋常ではなかった(と聞いている)。それにもかかわらず私がぐれなかったのは、母が間に立ってくれたおかげである。祖母も慰めてくれた。その祖母は目黒で皆にみとられて他界した。

簡単な柵で隔てられるだけの隣家に安江家が住んでいた。家族は、両親(主計(かずえ)、てい)、母の母(きよ)、5人の子供(明子、普子、晃太郎、三保子、万里子、睦子)であった。

両家は親しい関係にあり、父親同士は良く碁を打っていた(碁の実力は、安江氏の方が格段に高かった)。子供同士も仲良く遊んだ。

烏森小学校を卒業し、府立六中(現在の都立新宿高校)を受験したが落第し、日本中学校に入学した。

日本中学では成績が良く、1学期の成績は1番であった。父は縁故を辿り、麻布中学の転入試験を受験する機会を作った。幸い合格し、麻布中学に転校した。

中学校になると英語の授業が始まった。父は英語が得意で、英語の勉強を見てくれた。親子の間では厳しい言葉が交わされ、私は英語が大嫌いになった。その影響は今まで続き、英語会話は全く自信がない。この経験から、「私は決して自分の子供の家庭教師はやらない」と心に決めた。

小学校から中学校にかけての趣味は、ラジオの製作であった。祖母からお小遣いを貰い、神田神保町で部品を買い集め、鉱石ラジオを作った。真空管ラジオにも挑戦したが、完成はしなかった。

麻布中学は特長のある学校であった。生徒に勉強を強制することなく、生徒が自主的に考えて各人に自分の道を見つけるような校風であった。

授業も特長があり、特に影響を与えたのが幾何の授業であった。先生は教室に入ると、すぐに黒板の端に問題を書き、「私の授業を聞かなくても良い生徒はこの問題を解き、できたらいつでも結果を黒板に書きなさい」と言われた。数人の同級生は問題を競争で解いた。私もそれに挑戦した。これにより、私は幾何が大好きになった。数学一般は好きであるが、代数よりも幾何の方が好きである。

もう一人私の将来を決めることになった先生は化学を担当された小山誠太郎先生である。先生は東京大学理学部化学科を1935年に卒業された。先生の講義の中で忘れられないものがある。

マグネシウムのリボンを燃やして、灰を皿に受ける実験を見せ、「マグネシウムリボンの目方と灰の目方はどちらが重いか」と質問された。解答は2つに分れた。理科系の生徒はマグネシウムは酸化マグネシウムになるので重くなると答え、文化系の生徒は炭と灰の関係を思い出し軽くなると答えた。皆の答えを聞いた後に、実際の目方を量り、軽くなることを示した。理科系の私たちは啞然とした。「燃えるところを良く見なさい。灰の一部は煙となって空中に飛散しています。これを見ないで予想だけで答えるのはいけません」というのが先生の締めくくりであった。この教訓から、現在私がいつも言っている「データだけを見て判断してはいけない」が導き出された。小山先生の影響の大きいことは、後に東京大学に進学して痛感した。化学科の入学者28人の中に3人の麻布中学の卒業生がいた。一人は同級の中井君で、一人は1年上級の荻野君である。

麻布中学では、自然科学班と園芸班のメンバーであった。自然科学班は化学実験が自由にできるので参加した。園芸班は毎週土曜日の午後旧多摩川園のそばの農園に行き、畑作業をし、終わってから皆で色々話をするのが楽しみであった。園芸班で親しくした浦昭二さんとはその後深い関係があり、現在でも親しくしている。

隣家の安江主計さんは、逓信省の教育部門に所属されていた。戦争が進み、軍隊が南太平洋地域を占領すると、文官が現地で勤務することになった。主計さんは1942年(昭和17年)9月2日にボルネオに出征した。芳賀家の家族も一緒に見送った。その後、ボルネオで空襲により戦死された。終戦後遺骨箱が届けられたが、中身は空であった。次に記す芳賀家が山形に移ったのち、しばらく目黒に留まったが、空襲がひどくなると母親の故郷である山梨県に疎開した。

中学4年に進級するとき、父は山形放送局長となり転居することになった。私は翌年の高等学校受験に備え、また、麻布中学校という良い環境を大事にして、潔叔父さんの家にお世話になることになった。潔叔父さんの家は麻布中学から徒歩通学の圏内であった。叔父さん一家には大変なお世話になった。

戦争が進み、中学生も勤労動員に参加する機会が多くなった。現在の皇居前広場を整備する仕事から始まり、防空壕を掘る作業などが続いた。

1843年10月21日(昭和18年)青山の国立競技場で「出陣学徒壮行会」が開かれ、私も普子さんも見送る側として参加した。田所茂次さんは送られる側で38式小銃を肩に行進した。雨が降っていたが傘もささずに見送った。この日はいつまでも心に残った。戦後、競技場で初めてアジア各国から選手を集めて国際競技会が開かれた。開

会式の様子を見ると、「出陣学徒壮行会」が目に見え、「あの時送り出された人が東南アジアで沢山の人の命を奪った。その子供たちが同じ会場を歩いている」と思った。

4年生を終了した。当時は4年終了で高等学校に進学することができた。山形高等学校を受験したが不合格であった。

このままでは来年も期待できないということで、山形の家族と合流することになった。

学徒動員時代

山形中学に転入したが、勉強する間もなく、勤労働員で田んぼの「田おこし」、「田植え」、「草取り」に駆り出され、授業は僅かであった。

東京から転入し、標準語を話す生徒はいじめの対象となった。最近のいじめのように言葉によるいじめではなく、肉体的ないじめであった。数学の先生が誰にも答えられない問題を私に当て、私が答えるとその後のいじめはすごかった。

その後、群馬県の中島飛行機の小泉工場に動員された。

中島飛行機では、ゼロ戦の製造に参加し、機内の電気配線の配電盤の配線作業に従事した。子供時代に鉱石ラジオを作った経験のあったのが役に立ち、きれいな配線をすることができ、工員の皆さんに褒められた。

ゼロ戦はA6M5という記号で呼ばれた。Aは艦載戦闘機、6番目の機種、Mは三菱重工業の設計を表し、最後の6は設計変更の番号である。動員された時の機種がA6M5で、回転性能の良いことで、評価されていた。そのため、機体を軽くするように設計され、操縦席の後ろには防弾ガラスが無かった。アメリカの戦闘機の性能が向上し、ゼロ戦の裏に回り機銃掃射をすると一たまりもなかった。しばらくすると、厚い防弾ガラスがつけられた。重くなっただけ性能が低下したと想像する。また、戦争の様相の変化に伴い、機関銃が機関砲に代わり、胴体の下に爆弾をぶら下げるフックが追加された。

一生懸命仕事し、卒業の時「勤労章」を受賞した(授業がなかったため、優等賞は無かった)。

後にアメリカのワシントンの国立航空宇宙博物館でゼロ戦が展示されているのを見た時は、思わず機体を撫で、涙が出た。

父が山形にいたため、山形高等学校を受験することになった。2月に受験のため、山形に移動中宇都宮付近で空襲のニュースを聞いた。これは中島飛行機の空襲であった。

山形高等学校を受験した。30倍の難関であったが1次試験に合格し、1.5倍の中に入った。口頭試問の席で試験官の間で「局長の息子だ」というささやきが聞こえた。これなら合格できると思ったが、見事落第した。第2候補の米沢工業高等専門学校の応用化学科に入学した。

受験後、工場に戻ると、飛行機の残骸が飛散していた。飛行機の部品も入らなくなり、連続生産ラインの速度も落ちた。また、別の棟では人間爆弾のための飛行機が生産されていた。また、ゼロ戦の仕様も、機関銃から機関砲に変わり、最後にはこれらが取り除かれ、胴体の下に爆弾を付けるための道具が取り付けられた。

空襲の危険が増え、部品の供給が減って生産機数が減ったこともあり、地方(山形県、秋田県)からの勤労働員生徒は郷里に戻るようになった。山形の自宅に戻ってから3月末までは、山形市内の町工場部品製作の作業に携わった。

4月に米沢高等専門学校に入学したが、入学式も何もなく、新生は勤労働員され、山形県羽黒山の山腹に集められた。飛行機燃料としてガソリンが足りないため、松の木の根から取り出した松根油を蒸留したテルペン油が使われた。山に登り、松根を掘り出して、背中に負い、小学校の校庭に作られた蒸留装置まで運ぶのが仕事であった。途中で足を滑らすとひっくり返し、裏返しになった亀のようになり、起き上がることができなかったことが印象

に残っている。

羽黒山で終戦の放送を聞き、数日後に山形の自宅に帰った。

そのまま夏休みに入り、10月頃初めて米沢に汽車通学した。客車が少なく、連結された貨車に乗った。幸い客車に乗れたときも満員で、車両と車両の間の連結器の上に乗るという状況であった。

米沢時代

父は元軍人将校ということで、進駐軍の命令でNHKを追放された。家族は母の兄の田所茂一さんのお世話で上溝に転居した。

私は山形放送局の方のお世話で、赤湯温泉(山形と米沢の間)の尼寺に下宿することになった。

上にも述べたように、鉄道は正常状態ではなく、間隔は1時間以上であった。授業が終わり、列車を待つ間、図書館にあった古い英文タイプライターでタイプの練習をした。

当時は教科書を購入することができない状態であった。私がタイプの練習しているのを見た英語の先生から、教科書をガリ版原紙にタイプすることを頼まれた。この作業はかなり長く続いた。この経験が、大学入学後のアルバイトに役立つとは全く思わなかった。

終戦前後の食糧不足は現在では想像ができない程であった。下宿していた尼寺は信者の農家から届けられる食糧があったが、それでも、いつも空腹感があった。赤湯の駅から尼寺までは20分位歩く距離があるが、途中のお地藏さんの前でしばらく休まないと歩き続けることができなかった。

米沢高等専門学校で私に大きな影響を与えて下さった先生がお二人いる。ドイツ語の住吉先生と、物理化学の小谷野先生である。

住吉先生には、岡崎、渋谷、堀君らと4人でドイツ語の個人指導を受けた。岡崎君とは下宿と卒業研究を共にし、大学進学後も関係が続いた。岡崎・堀の両君は東北大学に進学し、堀君は山形大学文学部の教授になった。

住吉先生は戦時中は学生の生活指導を担当をされ、出征する学生を励ます役割があった。先生は私たちに「私は沢山の学生を戦場に送りだし、殺した。申し訳ないことをした」としばしば心情を吐露された。本当に良心的な人であった。食糧不足の時代に自宅に招いて食事を提供して下さいました。先生はその後広島大学に転勤され、呉に住んでおられた。社会人になってから数回自宅を訪問した。生涯の先生である。

小谷野先生は東京大学理学部化学科を大正14年に卒業された。先生からは、科学者としての基本的な考え方を教えて頂いた。3年生の卒業研究は小谷野先生の研究室を選んだ。卒業研究の報告は、論文賞に選ばれ、卒業式で表彰された。後に東京大学を卒業したとき、山形大学の小谷野研究室に入ることを薦められたが、家庭の経済事情からお断りしなければならなかった。

米沢高等専門学校を卒業後、電電公社NTTの就職試験を受け、採用された。

大学に進学したくて父に相談した。私の同級生で進学希望者は仙台の東北大学を受験した。父は、「東北大学はだめだが、東京大学なら良い」といつてくれた。当時父はNHKを去り、相模原の職業紹介所の職員でほそぼそと家族を育てていた。私が社会にでることで、少しは楽になることを期待していたのかも知れない。そこで合格の望みの少ない東京大学の受験を認めて、私の希望の芽を折らないようにしたと思われる。

戦前は、東京大学には高等学校の卒業生しか受験が許されなかった。東北大学は傍系(高等専門学校の卒業生)も受け入れる数少ない国立大学であった。戦後全大学が傍系に解放された。

東大の発表の日は一りで本郷に行った。沢山の人が集まっている掲示板に私の名前が書かれているのに驚いた。後に聞くと、傍系から30人が受験したが合格したのは私一人であった。潔叔父さんの家に行き結果を報告した。

自宅に戻り、父に報告すると、嬉しいような悲しいような顔をしていた。自分が合格できなかった東大に合格した

のは嬉しいが、どのようにして進学させるか経済的な問題が心配だったと想像される。父の了解を得て、NTT に出かけ、内定の取消しをお願いした。

東京大学時代

上溝からの通学は不便なので、潔叔父さんにお世話になった。叔父さんの家(麻布)は強制疎開で撤去されてなく、西荻窪の借間であった。後に北浦和に転居した。

山形に行く前に引き続き潔叔父さん一家との生活が始まった。

下宿生活

1 年余り潔叔父さんのお世話になった後、都内の王子飛鳥山の近くに下宿することにした。下宿料を節約するため、小学校の同級生田川明さんと同居した。

家庭教師

下宿代を稼ぐため、家庭教師の口を探した。大学の内職斡旋所で理学部化学科の学生限定の掲示を見て申し込んだ。一年上の上級生と二人が申し込み、くじ引きで私が当選した。

お宅に伺うと、元大学教授で、理化学研究所の主任研究員をしておられる方のお嬢さん(共立女子大学生)であった。田村？

しばらくすると、お父さんから「最近の研究のためには量子化学や分子構造の知識が必要になった。講義をして下さい」と言われた。1 冊の本を先生と読んで私が解説をすることになった。これは大変良い勉強になった。

田村家とは卒業前お付き合いが続いた。

大塚久雄先生一家との付き合い。

米沢の同級生岡崎さんの親戚に経済史の大御所である大塚久雄先生が居られた。

大塚先生はその歴史観から軍閥により大学を追われた。先生は日本の敗を予想し、終戦前に相模湖畔に疎開しておられた。岡崎さんに同行して相模湖のお宅を訪問した。

その後、東京の本郷に転居され、本郷のお宅に伺い、子どもさんたちの家庭教師をすることになった。家庭教師は名ばかりで、私の学資を援助するための口実であった。優秀な子どもさんたちとの交流は本当に楽しかった。

目黒高等学校の非常勤講師

下宿代が払えないので、中目黒のそばの目黒高等学校(現在の目黒学園)の非常勤講師を始めた。ラグビーが強いので有名であったが、生徒の学力は低い方であった。非常勤講師には、東京大学から私を含め 4 人いた。その中の中村隆英さんは後に統計審議会の委員長になった。

芸大の学生がおり、私のピアノ演習を見て貰った。名前は忘れたが後に有名なピアニストとして活躍した。

また、専任教師の中には虫明亜呂無さんがいて、会話を楽しむことができた。後に作家、評論家として大活躍されるのを知った。

授業は、数学、物理、化学を担当した。週 2 回朝から夕方まで講義をした。時間数を欲しい私のために定時の時間表の後に 1 時間追加するという便宜を与えて頂いた。校長先生は関口敏郎氏で、同じ名前なため？、親切にさせて頂いた。

生徒の質が余り高くないので、皆に理解して貰うにはどうすれば良いか、随分工夫を重ねた。これは私にとって大変良い経験であった。大学の文献紹介をしたとき、同級生から「君の説明はとても分かり易い」といって貰い、大変

嬉しかった。

森野研究室

安江普子との再会

卒業を前にした1951年1月？母が王子の下宿を訪ねた。時々溜まっている洗濯などで訪問して貰った。たまたま、東京に出張し、上溝の家に立ち寄った普子さんを同伴した。8年ぶりの再会であった。

8年間のめまぐるしい激しい変化の情報を交換した。普子さんは、甲府高等女学校に転校後、高松宮家で働くことになり上京した。高松宮家で空襲を体験した。終戦後山梨に移り、韮崎税務署に勤務していた。

その後手紙のやり取りが始まった。

岩国時代

寮生活

入社すると独身寮に入寮するのが普通であるが、学卒の独身寮(南陽寮)が一杯で社宅に分れて入寮した。私は、川瀬、**、世取山の4人で同じ家で生活した。暫くして**は南陽寮に移り3人になった。

コーラス

岩国工場に赴任すると、コーラスの会に入った。講堂での演習は楽しかった。毎年秋に開かれる朝日新聞の合唱コンクール山口県予選に出場し、山口県代表に選ばれた。熊本、長崎、別府で開かれた西日本予選に参加した。

統計との出会い。

大学では精密化学の実験をしていたが、会社での実験は天然物の木材を材料とし、原始的な装置での実験であるため、実験誤差が大きく、戸惑うことが多かった。このような状況の場合の実験に対して実験計画法という手法のあることを知った。麻布中学の同級生の浦さんが東京大学応用数学科の森口先生の研究室の助手をしていることを知った。夏休みに岩国で実験計画法の講習会を開くことをお願いした。これを機会に、実験計画法、データの統計解析に深入りすることになった。

結婚

岩国に赴任後も手紙のやり取りは続いた。

東京に出張の機会に、山梨の安江家を訪問し、睦子さんと一緒に昇仙峡を観光したことが記憶に残っている。

その後、普子さんは結核になり、埼玉県の毛呂山病院に入院した。2回？病院を訪れた。1年半？で無事退院し税務署に復帰した。

「岩国を見に来ませんか」とう手紙に応え、1953年7月？に岩国に来訪した。寮の仲間と宮島の海水浴場に行き、楽しんだ(結婚後？)。結婚することを決め、両親にお願いし、同意を得た。11月20日に東京で結婚式をした。

結婚後新築のアパートに新居を構え、約1年間の新婚生活を送った。その間、女子社員で後に社内結婚し長いお付き合いになった高野夫人、田中夫人と親しくなった。また、山田孝雄さん一家とも親しくなり、子どもさんが私の家に遊びに来た。

高松宮妃殿下が西日本旅行の中で岩国を訪問された。岩国駅に二人で出迎えた。それが新聞記者の目に触れ、新聞に写真が出て、社内で有名になった。宿舎を訪問し、私は初めて高貴な方との会話を経験した。

私は、労働組合に近い立場を取り、組合の中心人物との付き合いがあった。皆が集まる場所として私の家が使われ、会社の目にとまった。

通常3年以上の工場勤務の後に本社を含む他の事業所に転勤になるのであるが、2年余りで本社に転勤を命じられた。

市ヶ谷時代

1954年本社に転勤し、研究課に所属した。暫くして、東京大学工学部繊維化学科の祖父江研究室との共同研究が始まり、東京大学の中の総合試験所の中の研究室で研究をすることになった。

同じ研究室には、大久保さん、**さんがおり、国内留学で岩国工場から東京に進学していた**、**さんが助手をしていた。

同じ総合試験所には東京大学の電子計算機が設置されていた。

日本規格協会、日本科学技術連盟

増山先生、森口先生の指導による本の執筆

奥野先生との関係。

実験計画法と多変量解析法、通信教育、...

駒込時代

インドの4カ月

駒場時代

慶応大学

東京理科大学

退職後

医薬安全性研究会

安全性評価研究会(奈川の夏合宿)

「医薬品開発のための統計解析」セミナーと本